

「館山まると博物館」のピースツーリズム

－「平和の文化」を学び創造するまちづくり－

池田恵美子 NPO 法人安房文化遺産フォーラム

1. 逆さ地図の視点でエコミュージアム活動

南北逆さに地図を見ると、館山市は弧を描く日本列島の頂点に位置していることが分かる。海とともに生き、海路を通じて交流・共生してきた地である。いつもと違う逆さ地図の視点で足もとを見つめ直すと、今まで気づけなかった地域遺産に気がつく。負の遺産がプラスに見えてくる。

海上交通の要衝であるとともに、支配権力の重要拠点でもあった。『南総里見八犬伝』のモデルとなった房総里見氏は、長く安房国を治め、水軍をもち多くの海城を築いた。江戸期には直轄領となり、幕末には台場が置かれた。明治以降は東京湾要塞地帯とされ、昭和初期には軍都となった。半島先端部に、戦跡群と城跡群が重層的に存在する。

1970年代、地域全体を屋根のない博物館ととらえる「エコミュージアム」の考え方がフランスから提唱された。市民が主体となって、調査・展示・保全活動を通して、地域を発展させるまちづくり手法である。国内外でも施策としてエコミュージアムに取り組む自治体は多いが、館山のように市民の文化財保存運動から展開されている事例は珍しいと、高い評価を得ている。

2. 文化遺産を守る市民運動

1989年、地域教材を用いた世界史学習の授業づくりから、戦跡の調査活動がスタートした。これが契機となり、公民館講座やフィールドワーク、「学徒動員50年」「戦後50年」の平和展やメディア報道などを通じて戦跡は広く知られるようになり、2001年に地区公民館で「戦跡保存調査サークル」が発足した。

こうした流れを受けて市当局は、「平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する調査研究」をおこなった。悉皆調査により市内の戦跡は47確認され、下表のような高い評価が判明し、戦跡の活用を位置づけた館山市の目標像として「地

域まるとオープンエアーミュージアム館山歴史公園都市」構想を掲げた。なかでも代表的な「館山海軍航空隊赤山地下壕跡」は市有地にあったため、平和学習拠点として整備して2004年に一般公開が始まり、翌05年に館山市指定史跡となった。

＜館山市内の戦争遺跡＞	
Aランク（近代史を理解するうえで 欠くことのできない史跡）	18
Bランク（特に重要な史跡）	13
Cランク（その他）	16
合計	47

一方、里見氏稲村城跡は市道計画により破壊寸前となり、戦跡と同時期に並行して市民の保存運動が展開された。1996年に「里見氏稲村城跡を保存する会」が発足し、城跡めぐりや古道ウォーキング、講演会やシンポジウムなどの文化活動を通じて市民の関心を高めていった。全国から1万筆の署名も寄せられ、2005年に市道計画は凍結し、2012年に南房総市の岡本城跡とともに里見氏城跡群として国史跡に指定された。

長きにわたる2つの活動を導いてきた愛沢氏が代表となり、2004年にNPO法人安房文化遺産フォーラムを設立した。戦跡や城跡をはじめ魅力的な自然・歴史文化遺産を「館山まると博物館」と呼び、平和学習ガイドなどの教育支援や多様なまちづくり活動をおこなっている。

3. 「平和の文化」を学ぶ館山の旅

21世紀を迎えるにあたり、ユネスコの提唱を受けて国連は2000年を「平和の文化国際年」と宣言し、2001～2010年を「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」と定めた。「平和の文化 Culture of Peace」とは、あらゆる生命を傷つけることなく、暴力によらず対話によって対立を解決していこうとする価値観や行動

様式と定義される。

世界中に「平和の文化」を広めようとした矢先の2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が起き、「平和の文化」は風前の灯火となってしまった。これを憂いた元ユネスコ平和の文化局長のD.アダムスは、2004年に来日し、「平和の文化」を社会に実現するためには平和産業の創出が急務であり、それは「ピースツーリズム」であると訴求した。奇しくも同年、赤山地下壕が公開されてNPO法人を立ち上げた私たちは、この理念に賛同し、活動の柱とした。

安房地域には戦跡だけではなく、「平和の文化」を学ぶ教材が多い。たとえば、江戸期に建立された平和祈願のハンゲル「四面石塔」(千葉県指定有形文化財)や、清国遭難船救助記念の「日中友好」の碑などもある。また、本土決戦に備えて花作り禁止令が出された戦争末期に、命がけで花の種苗を守った農民のおかげで、現在の「花の房総」につながっているという逸話がある。関東大震災直後に各地で朝鮮人虐殺事件が起きた際、安房郡長は「朝鮮人を怖れるのは房州人の恥、朝鮮人を保護せよ」と指示したという記録もある。戦時下で苦しんだ女性たちを供養するために建てられた「名も無き女の碑」や「噫従軍慰安婦」の碑もある。「館山まるごと博物館」では戦跡というモノに限らず、先人たちが培った「平和の文化」を多面的に学び、語り継いでいる。

4. 平和学習プログラム

「館山まるごと博物館」の平和学習は、加害と被害の両面から学ぶことができる。しかし、沖縄・広島・長崎とは異なり、戦跡を見学しただけではその歴史背景を理解することは困難である。

そこで、約1時間の座学をテキスト付きで提供し、真珠湾と館山湾、沖縄県と千葉県、米軍の本土侵攻計画「コロネット作戦」と大本営の本土決戦防衛計画などの地図をそれぞれ比較しながら、世界戦略上に位置づけられた館山の役割を地政学的に紹介している。

1930年、関東大震災で隆起した館山湾を埋め立てて館山海軍航空隊が開かれた。「陸の空母」と呼

ばれ、艦上攻撃機のパイロットや落下傘部隊の特殊訓練がおこなわれた。

その南側に赤山地下壕がある。標高60mの内部には、網の目状に2km近く掘られた巨大な施設だが、ほとんど資料がなく、作られた時期は不明である。市教委の文化財看板には「終戦が差し迫った1944年より後に建設されたのではないか」と書かれているが、昭和一桁生まれの周辺住民は「日米開戦前から掘り始められていた」と証言している。

壕内の壁面は凝灰岩質砂岩で、鮮やかな地層や断層が美しい模様を描いている。平和学習だけでなく、総合学習の教材としても価値が高い。大部分が素掘りで、均等な力加減で掘られたツルハシ痕がくっきりと残っている。壊滅した震災後の地質調査をしたうえで場所を選定し、かなり早い段階から専門部隊によって秘密裏に掘られたモデル的な地下壕だと推察される。

壕内には「USA」と書かれた朱文字を見ることが出来る。これは、1945年9月3日に米占領軍3,500名が館山に上陸し、本土唯一「4日間」の直接軍政が敷かれた際に書かれたものと考えられる。日本の占領政策を考えるための試金石だった可能性が高い。近年米国より入手した占領軍司令官の報告書によると、赤山地下壕が単なる防空壕ではなく、管制機能をもつ航空要塞的な地下施設であったことが示唆される。

赤山地下壕の見学は、約250mを往復し、所要は1時間弱。近くには掩体壕(戦闘機の格納庫)もあり、希望に応じて多様なオプションルコースを組んでいる。

5. 市民協働のまちづくり

「館山まるごと博物館」活動では、多様な団体と協働を図り、市民が主役のまちづくりを進めている。

美術や水産史など、多岐にわたる文化遺産が様々に結びつき、面的なエコミュージアムを横糸とし、「平和の文化」を縦糸として、市民が主役の「館山まるごと博物館」のまちづくりを織り続けている。